

歌占

作 元雅 場所 加賀国白山ノ麓 季節 四月 分類 四番目

シテ 渡会某 ツレ 里人 子方 幸菊丸

～あらすじ

加賀国白山の麓に住む男(ツレ)が、幼子(子方)を連れ、歌占い(シテ)のもとを訪れる。それは、もと伊勢の神官、故郷を去った神罰により頓死した後に蘇生した者であった。某が二人の占いをするうち、幼子と親子である事に気づき、再会を遂げる。さらに、この再会も神慮ゆえと、帰郷を決意する。やがて、かつて見た地獄の有り様を舞い現すうちに錯乱しだすが、正気に戻り、我が子を連れ、故郷へと帰る。

～詞章

ツレ「雪みこし路の白山は。ゆき三越ちの白山は。夏陰いつくなるらん

かやうに候者は。加賀の国白山の麓に住まひする者にて候。偕も此程何處の者とも知らぬ男
覲の来り候が。小弓に短冊を付け歌占を引き候が。けしからず正しき由を申し候ふ程に。今
日まかり出で占を引かばやと存じ候

シテ「神慮。種とこそなれ歌占の。引くも白木の。手束弓

それ歌は天地開けし始より。陰陽の二神天の衢に行逢の。小夜の手枕結び定めし。代を学び
国を治めて。今も道ある妙文たり。

占問はせ給へや歌占とはせたまへや。神風や。伊勢の濱荻なをかへて。伊勢の濱荻名を異
へて。よしと云ふもあしと云ふも。同じ草なりと聞くものを。所は伊勢の覲なりとなにはの事も問ひ
給へ。人心。ひけば引かる。梓弓。伊勢や日向の事もとひ給へ日向のことも問ひたまへ

ツレ「いかに申すべき事の候 シテ「何事にて候ぞ ツレ「さて御身は何處の人にてわたり候ぞ。見
申せば若き人にて候が。何とて白髪とはなり給ひて候ぞ

シテ「げにげに普く人の御不審にて候。これは伊勢の国二見の浦の神職なるが。われ一見の為に
国々を廻る。ある時俄に頓死す。また三日と申すに蘇る。それよりかやうに白髪となりて候。

これも神の御咎と存候程に。当年中に帰国すべきと怠りを申して候

ツレ「さては其の謂にて候な。さらば歌占を引き申候べし

シテ「易きあひだのこと。一番に手に当たりたる短冊の歌をあそばされ候へ。勘へてまもらせ候べし

ツレ「北は黄に。南は青く東白。西紅のそめいろの山」

シテ「委しく判じて聞せ申さう。

それ今度の所労を原ぬるに。辺涯一片の風より發つて。水金二輪の重結に表わる。それ須弥
は金輪より長じて。其丈十六萬由旬の勢。四州常楽の波に浮み。金銀碧瑠璃玻球迦宝の
影。五重色空の雲に映る。されば須弥の影映るによつて。南瞻部州の草木緑なりと言へり。さ
てこそ南は青しとは詠みたれ。茲にまた父の恩の高きこと。高山千疊の雲も及び難し。されば父
は山。そめいろとは風病の身色。志かも生老病死の次第をとれば。西紅と見えたるは。命期
六爻の減色なれば。おおこれは已に難儀の所労なれども。茲にまた染色とは。声を假りたる
彩にて。文字には蘇命路なり。蘇る命の路と書きたれば。まことに命期の路なれども。また蘇
命路に却来して。再びここに蘇生の寿命の。種となるべき歌占の詞。頼もしく思しめされ候へ

子方「鶯の卵の中の郭公。其が父に似て其が父に似ず

シテ「これも父の事を御尋ね候な 子方「さん候父を失ひて尋ね申候

シテ「これははや逢ひたる占にて候ものを 子方「いや逢はねばこそ尋ね申候へ

シテ「さりとは占に偽よもあらじ。鶯にあふ詞の縁あり。また卵の中の郭公とも言へり。時も卯月程
時も合ひに合ひたり。や。今啼くは郭公にて候か 子方「さん候郭公にて候

シテ「面白し面白し。当面黄舌の囀。鶯のこは子なりけり子なりけり。不思議や御身は何處の人ぞ

子方「伊勢の国の者 シテ「在所は 子方「二見の浦 シテ「父の苗字は

子方「二見の太夫渡会の何某 シテ「さて其の父は 子方「別れて今年八箇年

シテ「さておことの幼名は 子方「幸菊丸と申すなり

シテ「こはそも神の引合せか。これこそ父の何某よ

子方「不思議や父にてましますかと。云はんとすれば白髪の シテ「身は志ら雪の面忘れ

子方「されども見れば我が父の シテ「こは子なりけり 子方「郭公の

ツレ「地獄の有様を曲舞に作りて御謡ひある由承り及びて候。とてものことに謡うて御聞せ候へ

シテ「易き御事にて候へども。此の一曲を狂言すれば。神気が添うて現無くなり候へども。よしよし
帰国のことなれば。面々名残の一曲に。現無き有様見せ申さん

シテ「一生はただ夢の如し。誰か百年の齡を期せん

地「万事は皆空し。何れか常住の思を為さん

シテ「命は水上の泡 地「風に随つて経めぐるが如し シテ「魂は籠中の鳥の

地「開くを待ちて去るに同じ。消ゆるものは再び見えず。去るものは重ねて来らず

「須臾に生滅し。刹那に離散す。恨めしき哉や。釈迦大士の慇懃の教を忘れ。悲しき哉や。
閻魔法王の。呵責の詞を聞く。名利身を資くれども。未だ。北亡の煙を免れず。恩愛心を悩ま
せども。誰か黄泉の貴に従はざる。これが為に馳走す。所得幾許の利ぞやこれに依つて追求
す。所作多罪なり。しばらく目を閉いで。往事を憶へば。旧遊皆亡ず。指を折つて。故人を数
ふれば。親疎多くかくれぬ。時移り事去つて。今何ぞ。渺茫たらんや他留まり自往く誰かまた
常ならん

シテ「三界無安猶如火宅

「天仙なほし死苦の身なり。況んや下劣。貧賤の報に於いてをや。何どか其の罪軽からん死
に苦を受重ね業に悲み尚添ふる。斬スイ地獄の苦みは。白中にて身を斬ること。千断して血
狼藉たり。一日の其中に。万死万生たり。劍樹地獄の苦みは。手に劔の樹を攀れば。百節
零落す。足に刀山踏むときは。劍樹共に解すとかや。石割地獄の苦みは。両崖の大石諸々
の。罪人を砕く次の火盆地獄は。頭に火焰を戴けば。百節の骨頭より。燄々たる火を出す。
或時は。焦熱大焦熱の。焰に咽び或時は。紅蓮大紅蓮の氷にとぢられ鉄杖頭を砕き火槍
足裏を灼く

シテ「飢ゑては。鉄丸を呑み

「渴しては。銅汁を飲むとかや。地獄の苦みは無量なり餓鬼の。苦みも無辺なり。畜生修羅の
悲みも我らに何かで優るべき。身より出せる科なれば。心の鬼の身を責めて。かように苦をば受
くるなり月の夕べの浮雲は後の世の迷なるべし

シテ「雪を散らせる如くにて ツレ「天に叫び シテ「地に倒れて

地「神風の一もみ揉んで。神風の一もみ揉んで。。時しも卯の花くたしの五月雨も降るやとばかり。
面には白汗を流して袂には。露の繁玉。時ならぬ霰玉散る。足踏はとういと。手の舞笏拍子。
打つ音は窓の雨の。震ひ戦き立つ居つ肝胆を砕き神の息申し上ぐると見えつるが。神は上ら
せ給ひぬとて。茫々と。狂ひさめて。いざや我が子うち連れて。思ふ伊勢路の古里に又も帰
りなば二見の浦。又も帰らば二見の。浦千鳥友よびて伊勢の国へぞ帰りける伊勢の国へぞ帰
りける

※ 一部、省略してあります。